

陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の紫による書入訓について

―京大本代赅書入との比較から―

大石 真由香

一 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入の書誌的性格

陽明文庫には、「古活字本万葉集」十冊（二十卷）すべてに墨、朱、緑、紫（巻一目録部分のみ黄）で書入が施された本が所蔵される（以下、「古活字本」）。筆者は以前にこの本の紫による書入について検討し、これが現存しない禁裏御本から直接書写された可能性を持つ唯一の資料であることを指摘した^①。くり返しにはなるが、ここで当該本について改めて確認しておく。

書入は、その筆跡から近衛信尋・尚嗣^{のぶひろ ひさつぐ}によるものがあることが知られ、書入時期は近世初期と推定される。仙覚文永本系の写本では、仙覚以前の付訓を墨、仙覚改訓箇所を紺青、そして仙覚が新たに訓を付した箇所を朱で書くのが常である。また、中院本系の本では、代赅または紫で禁裏御本との校合を記している^②。当該本の書入においても、基本的な訓の色分けはこれに従っており（ただし、紺青の代わりに緑に近い色を用いている）、付訓形態は片仮名傍訓である。

「古活字本」自体は、慶長年間に刊行されたとされる所謂活字無訓本であり、序跋、奥書、刊記等が存在しない。しかし、当該「古活字本」は巻二十に奥書の補写が見られる。補写奥書は以下の六種が存する。

① 文永三（一二六六）年八月二十三日（紫にて文永二年九月

十三日に訂正）仙覚奥書

② 応長元（一三一一）年十月二十五日寂印奥書

③ 文和二（一三五三）年八月二十五日成俊奥書

④ 永和元（一三七五）年十一月二十五日由阿奥書

⑤ 応永二十五（一四一八）年卯月上旬範政奥書

⑥ 和歌一首「かきよせてきよむとすれとよろつ葉のおつるはたえぬ松のした庵」

このうち、①③④⑤がそれぞれ同筆であるが書写者は不明、⑥は近衛尚嗣筆である。①③④は、仙覚文永十年本のうち寂印成俊本と言われる系統の本に存する奥書である（紫の書入部分は除く）。①の奥書の「文永三年歳次丙寅八月廿三日」の左に紫にて「文永二年歳次乙丑九月十三日」に訂正があるのは、校合本に文永二年とあったために、校異を書き記したものと考えられる。④⑥は、今川範政が仙覚文永本を底本とし、仙覚寛元本を校合して作ったとされる所謂禁裏御本から出た奥書である。⑥の和歌一首も範政奥書の一部と考えられる。

『万葉集』巻二十にこの①⑥のすべての奥書を持つ本としては、他に中院本系に属する京都大学附属図書館所蔵曼朱院本『万葉集』（以下、京大本）がある^③。京大本は、奥書①に相当する箇所の冒頭に代赅の合点を記し、これが禁裏御本にも存したことを記している。また、

奥書①の日付について、代赅で「丙寅」を「乙丑」に、「八」を「九」に、「廿」を「十」に訂正する（「三」から「二」への訂正は見られない）。当該「古活字本」書入の紫による奥書訂正も同様に禁裏御本に由来のものと考えて誤らないだろう⁽⁴⁾。このことから、当該「古活字本」の書入は、中院本系に近い本を校合本として成立したと考えられる。

ところが、奥書⑤の範政の署名の下に、京大本を含む中院本諸本には花押の代わりに「判」と記してあるところ、当該「古活字本」補写奥書では校合本に存したと思われる花押をそのまま写している。当該「古活字本」の補写奥書④⑤⑥および紫による書入は、本来花押を持つべき原本である禁裏御本を直接書写した可能性が高い。そうであるならば、中院本原本が現存しない今、当該本は禁裏御本を直接書写した唯一の現存本ということになる。以上のことから、当該本は禁裏御本復元のための重要な資料になると考えられる。

二 本稿の目的

禁裏御本を復元することの意義については、田中大士氏⁽⁵⁾に詳しく論じられている。田中氏は、禁裏御本を書き入れたものとされる京大本代赅書入の調査から、京大本代赅書入に見える禁裏御本訓は、神宮文庫本等現存する仙覚寛元本系の本には残らない、仙覚寛元本本来の姿をとどめたものであることを証明された。そして、「これらの訓を、仙覚寛元本の訓として分析することで、仙覚の校訂作業の過程が飛躍的に明らかになることは想像に難くない。」と、禁裏御本訓の解明の意義について説明されている。

神宮文庫本は現存する仙覚寛元本系の代表とされるが、『校本万葉

集』首巻⁽⁶⁾においてすでに「その（寛元本の…筆者注）純粹なるものではない」とされている。仙覚寛元本の奥書（京大本巻一禁裏御本奥書所引寛元本奥書）には、次のようにある。

此等のごとき道理に依りて、漢字の右に仮名付け了んぬ。他本の和に難有る歌の時は、墨を以て又字の左に之を点ず。其の和の間、言辞の道理と云ひ、符合せざるの所は、字の左に朱を以て愚点し了んぬ⁽⁷⁾。

これによれば、寛元本は底本の訓を右に、難ある歌についてはイ訓を墨で左に、仙覚自身の訓は左に朱で書くとある。田中氏論文に、寛元本の奥書に述べられた付訓形態についての模式図が提示されているので、左に転載した。

右側 底本の訓

歌本文

左側 仙覚の訂正訓（朱）

しかし、神宮文庫本は仙覚訓を左に書く場合と右に書く場合とが巻によって異なっており、完全なる寛元本は現存していないのである。そこで、寛元本の姿をとどめた禁裏御本の復元が重要な課題となる。

中院本とは別の経路で禁裏御本の訓を書き入れた当該「古活字本」の紫訓は、京大本代赅書入のみでは成しえなかった寛元本の復元を高い精度で行うことを可能にする。本稿は以上のことを踏まえ、当該本の紫訓が京大本代赅書入訓を補う点について指摘するものである。

【別表】京大本・陽明「古活字本」の訓対照表

●巻三・四八一歌

歌句	京大本本文	京大本訓	京大本代繕訓	陽明「古活字本」 訓	陽明「古活字本」 紫訓	神宮文庫本	一致	西本願寺本	紀州本	一致	広瀬本
3	藤寐	ナヒキネシ	イネラレス (左)	ナヒキネシ	イネラレス (左)	(ナヒキネシ／朱) (イネラレス／左朱)	○	ナヒキネシ	イネラレス (ナヒキネシ／左朱)	○	ナヒキネシ
16	手本矣別	タモト (ヲワカレ／青)	—モコト (左)	タモト (ヲワカレ／緑)	—モコト (左)	(タモトモコト／朱) (—ヲワカレ／右書入)	○	タモトヲ (ワカレ／元青)	タモトモコト (—ヲワカレ／左朱)	○	タモトニワカレ
17	丹梓火尔之 (ニキ／青)	ニホヒー (右) ニタクヒー (左)	ニホヒー (右) ニタクヒー (左)	(ニキ／緑) ヒニシ	ニホヒー (右) ニタクヒー (左)	(ニタクヒニシ／朱) (—キー／右書入)	○	(ニキ／元青) ヒニシ	ニタクヒニシ (—キー／左朱)	○	ニキホヒシ
18	家従養出而 イヘ (ヲ／青) モイテハ	—ヨリー (左)	イヘ (ヲ／緑) モイテハ	—ヨリー (左)	(イヘタモイテハ／朱) (—ラー／左朱) (—ユー／右書入)	×	イヘ (ヲ／元青) モイテハ	イヘヨリモイテハ (—ラー／左朱)	○	イヘヨリモテハ	
21	朝霧	アサキリノ	*	アサキリノ	—ニ (右)	(アサキリノ／朱)	×	アサキリノ	アサキリノ	×	アサキリノ
24	相楽山乃 サカラカヤマノ	*	サカラカヤマノ	—ノ— (右) サカラカー (左)	(サカラカヤマノ／朱) (—ノ—／右書入)	○	サカラカヤマノ	サカラカヤマノ	×	サカラカヤマノ	
25	山際	ヤマノマヲ	(ヤマノマヲを消し) ヤマキハ— (右) ヤマノハニ (左)	ヤマノマヲ	ヤマキハニ (右) ヤマノハニ (左)	(ヤマノマヲ／朱) (—キハニ／左朱)	○	ヤマ (ノマ／元青) ヲ	ヤマキハニ	○	ヤマキハヲ
28	将為便不知	セムスヘシヲ (ニ／青)	—シラヌ (左)	セムスヘシヲ (ニ／緑)	—シラヌ (左)	(セムスヘシヲニ／朱) (—ラス／左朱)	△	セムスヘシヲニ	セムスヘシヲヌ (—シヲニ／左朱)	○	セムスヘシヲヌ
34	入居嘆舎 イリキナケクヤ	—ナケカム (左)	イリキナケクヤ	—ナケカム (左)	(イリキナケクヤ／朱) (—ナケカン／左朱) (—キテ／右書入)	○	イリキナケクヤ	イリキナケカム (—ナケカム／左朱)	○	イリキナケクキ	
36	児乃泣母 コノ (ナカシメハ／青)	—ナクハハ (左)	コノ (ナカシメハ／緑)	—ナクハハ (左)	(コノカナシメハ／朱) (—ナケルヲモ／右書入)	×	(コノカナシメハ／元青)	コノナクハハ (コノナカシメハ／左朱)	○	チコノネナキモ	
37	雄自毛能 (ヲノコシモノ／青)	ヲミツカラモヨク (左)	(ヲノコシモノ／緑)	ヲミツカラモヨク (左)	(ヲノコシモノ／朱) (トリ—／右書入)	×	(ヲノコシモノ／青)	ヲミツカラモヨク (ヲノコシモノ／左朱)	○	オホシホノ	
42	効矣無跡 シルシヲナ—ト	—モナシー (左)	シルシヲナ (ミ／緑) ト	—モナシー (左)	(シルシヲナミト／朱) (—モナシー／左朱)	○	シルシヲナ (ミ／元青) カ ト	シルシモナシト (—ヲナミト／左朱)	○	シルシモナシト	
47	因鹿跡観念 ヨスカトソオモフ	イカニ— (左)	ヨスカトソオモフ	イカニ— (左)	(ヨスカトソオモフ／朱)	×	ヨスカトソオモフ	イカニトソオモフ (ヨスカ—／左朱)	○	ヨスカトソオモフ	

●巻四・五〇九歌

歌句	京大本本文	京大本訓	京大本代繕訓	陽明「古活字本」 訓	陽明「古活字本」 紫訓	神宮文庫本	一致	西本願寺本	紀州本	一致	広瀬本
1	巨女乃	マウトメノ	オウトメノ (左)	マウトメノ	オウトメノ (左)	(マウトメノ/朱)	×	マフトメノ (ヲフ古本—/ 貼紙別筆)	オフトメノ (マフトメノ/左 朱)	○	ヲフメノ
2	匡尔乗有	クシケニノ (ス/青) ル	*	クシケニノ (ス/ 緑) ル	—レー (右)	(クシケニノレル/朱) (墨にてレを消し) (—ス—/右朱)	○	クシケニノ (ス/ 元青) ル	クシケニノレル	○	クシケニノレ ル
3	鏡成	カハミナス	—ナル (左/ 有入替記号)	カハミナス	—ナル (左)	(カハミナス/朱) (—ナル/左朱)	○	カハミナス (—ナル/左)	カハミナル (—ナス/左朱)	○	カハミナル
5	狭丹頬相	サニツラフ	—ニ (左)	サニツラフ	—ヒ (左)	(サニツラフ/朱)	×	サニツラフ	サニツラヒ (—フ/左朱)	○	サニツラアヒ
6	紐解不離	ヒモトキ (サ ケス/青)	—ノケス (左/ 有入替記号)	ヒモトキ (サケス /緑)	—ノケス (左)	(ヒモトキサケス/ 朱)	×	ヒモトキ (サケス /元青) (—ノケス古/貼 紙別筆)	ヒモトキノケス (—サケス/左 朱)	○	ヒモトキノケ ス
10	旦霧隠	アサキリ (コ モリ/青)	—カクレ (左/ 有入替記号)	アサキリ (コモリ /緑)	—カクレ (左)	(アサキリコモリ/ 朱) (—カクレ/左朱)	○	アサキリ (コモリ /元青) (—カクレ/左)	アサキリカクレ (—コモリ/左朱)	○	アサキリカク レ
12	哭耳之所哭	ナキノミソナ ク	ネノミソソナク (左)	ナキノミソソナク	ネノミソソ—(左)	(ナキノミソソナク/朱)	×	ナキノミ (シ/元 青) ソナク	ナキノミソソナク (ネノミソソナク/ 左朱)	○	ナキノミソソ ナク
25	直向	タハムカフ	—ムカヒ (左/ 有入替記号)	タハムカフ	—ムカヒ (左)	(タハムカフ/墨→ 朱)	×	タハムカフ	タハムカヒ	○	タハムカヒ
28	背尔見管 (ソカヒ/青) ニミツハ	(ソカヒを消し) ウシロー (右) ソムキ— (左)	(ソカヒ/緑) ニ ミツハ	ウシロー (右) ソムキ— (左)	(ソカヒニミツハ/墨 →朱)	(ソカヒニミツハ/墨 →朱)	×	(ソカヒ/元青) ニミツハ (ウシロ古—/ 左)	ウシロニミツハ (ソムキニ—/左 朱)	○	ウシロニミ ツハ
30	水手之音喚 (カコ/青) ノヲトヨヒ	*	(カコ/緑) ノオ トヨヒ	コキシ— (左)	(カコノオトヨヒ/墨 →朱) (—コエ—/左朱)	(カコノオトヨヒ/墨 →朱) (—コエ—/左朱)	×	(カコ/元青) ノ ヲトヨヒ	コキシヲトヨヒ (ヤコノ—/左朱)	○	コキシヲトヨ ヒ
36	射性廻 (イ/青) ユ キ (モトホリ /青)	*	(イ/緑) ユキ (モ トホリ/緑)	—メクリテ (右) イデユキカヘル (左)	(イユキモトホリ/墨 →朱)	(イユキモトホリ/墨 →朱)	×	(イ/元青) ユ キ (モトホリ/元 青)	イデユキカヘル (イユキモトホリ/ 左朱)	○	イデユキカハ ル
39	鳥自物 トリ (シモノ /青)	—ヨリモ (左/ 有入替記号)	トリ (シモノ/緑)	トリヨリモ (左)	(トリシモノ/墨→ 朱)	(トリシモノ/墨→ 朱)	×	トリ (シモノ/元 青)	トリヨリモ (トリシモノ/左 朱)	○	トリヨリモ
40	魚津左比去 者 (ナ/青) ツ サヒ (ユケ/ 青) ハ	イヲツサヒユケ ハ (左/有入 替記号)	(ナ/緑) ツサヒ (ユケ/緑) ハ	イヲツサヒ— (左)	(ナツサヒユケハ/墨 →朱)	(ナツサヒユケハ/墨 →朱)	×	(ナ/元青) ツサ ヒ (ユケ/元青) ハ	イヲツサヒユケハ (ナツサヒユケハ /左朱)	△	イヲツサケユ ケハ
44	四時二生有 (シシ/青) ニオヒタル	トシニ— (左 /有入替記号)	(シシ/緑) ニオ ヒタル	トシニ— (左)	(シシニオヒタル/墨 →朱)	(シシニオヒタル/墨 →朱)	×	(シシ/元青) ニ オヒタル	トシニオヒタル (シモ—/左朱)	○	シシニヲヒタ ル

*表内の網掛けの項目は、京大本代繕訓と陽明「古活字本」紫訓とが相違している箇所を示す。

表内の「」は、該当箇所に訓が存在しないことを示す。

*「一致」の項目は、陽明「古活字本」紫訓と各本との一致・不一致を示す。

三 当該「古活字本」の紫による書入訓の性格

ここでまず、当該「古活字本」の紫訓の性質について確認したい。

田中氏⁸⁾は、巻三・四八一歌と巻四・五〇九歌を取り上げて京大本代赅書入訓と西本願寺本（文永本）・神宮文庫本の訓とを比較し、「神宮文庫本が寛元本である巻三では京大本代赅書き入れと訓が似ていて、文永本である巻四では京大本代赅書き入れと訓があまり似ていないという傾向は明白である。」とされる。

田中氏と同様に、当該「古活字本」の巻三・四八一歌と巻四・五〇九歌のすべての紫訓を「別表」に取り出してみると、当該「古活字本」紫訓の神宮文庫本との一致は、巻三・四八一歌では一三例中八例（一致率六一・五％）、巻四・五〇九歌では一四例中三例（一致率二二・四％）である⁹⁾。当該「古活字本」紫訓には京大本代赅書入にない訓が含まれるが、双方に代赅または紫の書入のある箇所については、その訓はほぼ一致する。

なお、巻全体の紫訓の神宮文庫本との一致は以下のようになる。

当該「古活字本」紫訓		神宮文庫本との一致	
巻一	一三七例	六四例	（一致率四六・七％）
巻二	二五六例	四五例	（一致率一七・六％）
巻三	三四九例	二〇六例	（一致率五九・〇％）
巻四	二五八例	一〇二例	（一致率三九・五％）
京大本代赅書き入れ			
巻一	一四一例	五〇例	（合致率三五・五％）
神宮文庫本と合致する例			

田中氏論文によれば、京大本代赅書入の神宮文庫本との一致は以下の通りである。

巻二	二四六例	二七例	（合致率一一・〇％）
巻三	二六七例	一六二例	（合致率六〇・七％）
巻四	二〇一例	六六例	（合致率三二・八％）

本稿での巻一～四の調査結果を、田中氏論文で示された京大本代赅書入の調査結果と比較すると、おおよその傾向としては近似していると言える¹⁰⁾。当該「古活字本」紫訓と京大本代赅書入とが同一の本を祖に持つことはほぼ間違いないであろう。しかし書入訓の数は、例えば巻三の京大本代赅書入が二六七例であるのに対して当該本紫訓が三四九例、巻四の京大本代赅書入が二〇一例であるのに対して当該本紫訓が二五八例と、当該「古活字本」の紫訓のほうが多くなっている。そして、「別表」の巻四・五〇九歌を見ると、当該本紫訓にあつて京大本代赅書入にはない三例、および京大本代赅書入と異なっている一例がいずれも紀州本と一致していることが注目される。

田中氏¹¹⁾は、先に模式図を示したような、右側に底本の訓を、左側に朱で訂正訓を加えるという寛元本の付訓方針が紀州本の形態と酷似していることを指摘し、寛元本的性格と文永本的性格とが混在する神宮文庫本には残らない寛元本本来の姿は、紀州本によって知ることができると言う。ただし、紀州本の仙覚訂正訓の書入は巻四までしかなく、さらにそれを補うものとして京大本代赅書入に見える禁裏御本との校合の跡が、寛元本を復元するための重要な役割を担うということになるのである。

ここで、当該「古活字本」紫訓の巻一～四と紀州本とを比較すると、以下のような結果が得られた。

当該「古活字本」紫訓		紀州本との一致	
巻一	一三七例	八〇例	（一致率五八・四％）

卷二	二五六例	一九八例	(一致率七七・三%)
卷三	三四九例	二三五例	(一致率六七・三%)
卷四	二五八例	二〇三例	(一致率七八・七%)

紀州本との訓の一致は、神宮文庫本と比較して高い率を示す。この結果は、当該「古活字本」の紫訓が、寛元本の姿を色濃くとどめるものであることを示していると考えられる。

さらに、個々の訓のありようからも、当該本紫訓と紀州本とが近い関係にあることが推測される例が見られる¹²⁾。ここでは特に、京大本代赭書入には存在しない当該本紫訓について例をあげる(非仙覚本系片仮名訓本に傍線を付した)。

- (例一) 卷三・四二三・第二〇句「タエシトオモヒテ不絶等念而」
- ・タエシトオモヒテ……広、宮(朱)、矢、近、京、陽古
 - ・タエシトヲモヒテ……古、細(二)、細(二)・右
 - ・タヘシトオモヒテ……細(一)・朱、西
 - ・タヘシトオモイテ……陽、温
 - ・タエムトオモヒテ……紀、陽古(右紫ノム)

この例は、仮名遣いの問題はあるものの、「不絶」の部分については紀州本と当該本紫訓を除くすべての本で「タエ(へ)シ」と訓まれている。紀州本の訓のみが明らかに異質である。「不絶」は漢字に即して訓めば打ち消しの語を伴わねばならず、「タエム」と訓むことは不可能である。非仙覚本系片仮名訓本である古葉略類聚鈔、細井本(巻四への重複箇所)、広瀬本が「タエシ」と訓む中、紀州本と当該本紫訓のみが「タエム」の訓を共有している。漢字に即して訓めば出てくるはずのない訓を共有することは、紫訓の校合本と紀州本とが系統的

に近いことをうかがわせる。当該本紫訓の祖本は、片仮名訓本の中でも特に紀州本に近いものであったか、紀州本に近い系統の本による校合を経ている可能性がある¹³⁾。

このように当該本紫訓は、寛元本の底本になった非仙覚本系片仮名訓本の系統に近いとされる紀州本と、数値の上だけでなく、実際の訓のありようからも近似する傾向が見られるのである。

四 当該「古活字本」の訓がすべて紫で書かれる二丁分

さて、当該「古活字本」巻十一の三十四丁表にある二七一四歌から三十七丁表の二七四一歌までは、墨、緑等による訓がなく、すべての訓が紫で書かれている。この部分は、京大本では二十八丁表から二十九丁裏の丁度二丁分にあたる。これは、当該「古活字本」の校合本である写本においてこの二丁に墨訓、紺青訓がなかったか、当該本の墨、緑による書入の際にこの二丁分を書き落としてしまい、紫で書入を行った際にすべての訓を紫で記したか、いずれかの事情が推定できる。この二丁分の紫訓を精査することにより、純粹なる紫訓の校合本、すなわち禁裏御本の姿を復元できると考えられる¹⁴⁾。この二丁分の紫訓のうち、主に京大本との異同のある箇所について考察を加える¹⁵⁾。

- (例二) 卷十一・二七一六・第四句「ワレテソオモフ破衣念」
- ・ワカレテソオモフ……類
 - ・ワレテソヲモフ……古
 - ・ワレテソオモフ……広、宮、細、文、紀、西、陽、温、矢、近、京、陽古(紫)

・クタケテソ …… 西(左)、陽(左)、温(左)、矢(左)、近(左)、
京(左)

(例三) 卷十一・二七三一・第四句「所依之君尔」
(ヨラレシキミニ／紫)

・ヨレトモキミハ …… 嘉、類

・ヨレリシ君カ …… 古

・ヨラレシキミニ …… 広、宮、細、文、紀、西、陽、温、矢、近、京、

陽古(紫)

・コヒシキ …… 文(左)、西(左)、陽(左)、温(左)、矢(左)、

近(左)、京(左) 緒にてコヒシキを消す

この二例は、非仙覚本系片仮名訓本である広瀬本、寛元本系の神宮文庫本、細井本、およびすべての文永本で主訓に異同がない。そして、ほぼすべての文永本に共通の左訓「クタケテソ」「コヒシキ」を持つ。しかし、当該紫訓にはこれら左訓が存在しない。しかし、これらの例によって紫訓の校合本が文永本ではないと判断するのは早計である。

(参考例一) 卷三・三八〇・第五句「君尔不相鴨」
(キミニアハシカモ／紫カモ)

・キミニアハヌカモ …… 類、広、紀、細(一)、宮

・キミニアハシカモ …… 西(シ青)、陽(シ青)、温、矢(シ青)、近(シ

青)、京(シ青)、陽古(シ紫)

(参考例二) は、本来、当該「古活字本」書入としてあるべき緑訓が抜けているところに、紫で補写してあるという例である。書写に多くの色を用いる『万葉集』写本において、紺青訓・朱訓の脱落はままあることである。諸本の訓を見ると、非仙覚本および仙覚寛元本の訓「キミニアハヌカモ」と、文永本の訓「キミニアハシカモ」とに異同

があり、紫訓は文永本の訓を持っていることになる。この例から、紫訓の校合本は本来、文永本の訓を主訓として持つものであったと考えられる。

ここで、(例三) において、京大本の左訓「コヒシキ」を代赅で消してあることに着目したい。第一節で述べたように、当該紫訓と京大本代赅書入とは非常に近い関係にある。この代赅が「コヒシキ」を消していることはつまり、当該紫訓の校合本においても同様に、文永本の左訓を消す記号が付されていたのではないかと想像される。つまり、この紫訓は、校合本を忠実に写し取っているのではなく、ミセケチ等の記号のある場合はその指示に従い、清書するように書写しているのではないかと考えられる。

一方、左訓が残されたままの箇所もある。京大本との異同箇所ではないが、重要な例であるので、ここにあげておく。

(例四) 卷十一・二七一六・初句「自高山」
(タカヤマニ／紫)

・タカヤマニ …… 類、古、広、宮、細(左)、文(左)、西(左)、矢(左)、
近(左)、京(左)、陽古(左紫)

・タカネヨリ …… 宮(右)、細、文(青)、紀、西(青)、陽(青)、温、
矢(青)、近(青)、京(青)、陽古(紫)

・カヤマニ …… 陽(左)、温(左)

(例四) も文永本諸本に左訓のある例である。(例二)(例三)と異なり、当該紫訓もこの左訓「タカヤマニ」を持つ。(例二)(例三)は、非仙覚本や寛元本になく、文永本のみが持つ「クタケテソ」「コヒシキ」の訓が紫訓に反映されていないという例であった。一方、(例四)の左訓「タカヤマニ」は類聚古集、古葉略類聚鈔、広瀬本の主訓であ

るため、非仙覚本由来の訓であると言える。そしてそれが寛元本系の神宮文庫本、細井本にも受け継がれている。つまり、紫訓は文永本のみに存する左訓を省き、寛元本以前から存在する左訓は残していることになる。

(例五) 卷十一・二七三四・第三句「細砂裳」
(マサコニモ／紫)

・マサコニモ……嘉、類、古、広、宮、細、西(左／マサコニ)、陽(左／マサコニ)、温(左／マサコニ)、京(左／マサコニ)、陽古(紫)

・マナコニモ……宮(左／マナコ)、細(左／マナコ)、西(ナ元青)、文(ナ青)、陽(ナ青)、温、矢(ナ青)、近(ナ青)、京(ナ青)、陽古(左紫／マナコ)

この例は、非仙覚本に由来し、寛元本系の二本においても主訓となる「マサコニモ」を当該紫訓において主訓に採る例である(寛元本系の本に傍線を付した)。文永本諸本の主訓はすべて「マナコニモ」であるが、紫訓はこれを左訓として書く。「マサコニモ」を主訓とし、「マナコ」を左訓とするのは、現存する寛元本系の本と同じであり、京大本の主訓と代赭訓の関係と丁度入れ替わったような形になっている。文永本諸本で「ナ」が青字で書かれることから、これが仙覚訂正訓であることが分かる。非仙覚本の訓を主訓として書き、仙覚訂正訓を左に書く当該紫訓は、京大本代赭書入より寛元本のあり方としてふさわしいと言える。同じような例が巻四にも見られる。

(参考例二) 巻四・五七六・第三句「不楽牟」
(クルシケム／紫)

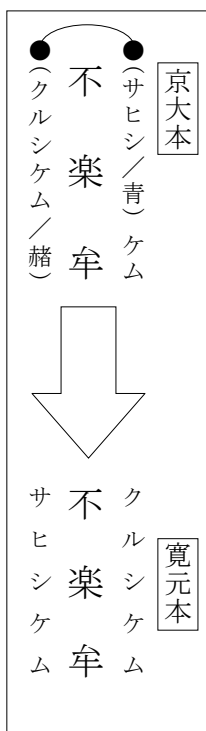
・クルシケム……元、桂、類、広、紀、西(左／クルシ古)、京(左

緒／主訓との入替記号あり)、陽古(クルシ紫)

・サヒシケム……宮、西(サヒシ元青)、陽(サヒシ青)、温、矢(サ

ヒシ青)、近(サヒシ青)、京(サヒシ青)、陽古(左

(参考例二)は、当該本に本来あるべき緑訓「サヒシ」を欠いており、その部分を紫で「クルシ」と補写し、さらに左に紫で「サヒシケム」と記している。「クルシ」訓は西本願寺本にも存在するものの左訓であり、寛元本系の神宮文庫本を含むすべての仙覚校訂本において主訓は「サヒシケム」である。文永本諸本で「サヒシ」が青字で書かれることから、これが仙覚訂正訓であることが分かる。ここで、京大本に代赭で左右の訓を入れ替える記号が付されていることに着目したい。京大本は、主訓は「サヒシケム」であるが、左にある代赭訓「クルシケム」が校合本には右にあったことを示している。つまり、代赭訓の校合本には、次点本系の訓「クルシケム」が主訓としてあり、左に仙覚訂正訓「サヒシケム」があつたものと推測される。当該「古活字本」は、たまたま緑訓を欠いていたために、校合本の指示記号に従って清書するように書き入れた結果、本来あるべき寛元本の形を再現することになったのではないかと推測される。



さて、(例五)に戻ると、『校本万葉集』を見る限り、京大本の代赭に左右の訓の入替記号は付されていないようである。しかし、当該紫

訓が校合本そのものを忠実に写し取っているわけではないことはこれまでに述べてきた通りである。(例五) もまたその校合本に左右の訓の入替記号が書かれており、紫訓がその校合本の指示に従った結果、寛元本の姿を再現することになった例と推測できる。

以上のことから、文永本を底本とし、それに寛元本その他を校合して成ったと想定される校合本に対し、当該箇所紫訓は、特に寛元本の状態を復元するような形に書き入れられていると考えられる。

五 展望に代えて

ここまで、当該本の紫訓には寛元本的な要素が非常に強く、特に紀州本とは系統的に近い関係にある可能性が高いことを述べてきた。しかし紫訓には、紀州本や、寛元本系の本を含む『校本万葉集』所収諸本のいずれとも一致しない訓を有する例もある。ここでは、主な他出文献の訓を併せて載せた¹⁶⁾。

(例六) 卷四・七三二・第五句「千遍立十方」
(チヘニタツトモ)

・チヘニタツトモ……元、広、紀、宮、西、陽、温、矢、近、京、

陽古、古今和歌六帖、僻案抄、伊勢物語集注

・チタヒタツトモ……陽古(右紫／タヒ)

(参考例三) 卷四・六〇三・第四句「千遍皆吾者」
(チタヒソワレハ)

・チヘニソワレハ……元、類、陽古(左紫／ヘニ)

・チタヒソワレハ……金

・チタヒソワレハ……広、紀、宮、西、陽、温、矢、近、京、陽古、

拾遺集、古今和歌六帖、奈良御集

(例六) は、『校本万葉集』所収諸本、および他出文献の訓がすべて「チヘニ」で異同がない。『万葉代匠記』(初稿本)¹⁷⁾に「千遍はちたびともよむべし」とあるが、紫訓の書入時期から考えて、『万葉代匠記』の訓が混入することは考えがたい。これには、(参考例三)の「千遍皆吾者」など他の歌の訓が参考になる。(参考例三)において紫で書かれる「チヘニ」は元暦校本、類聚万葉に存する平仮名訓本の訓であり¹⁸⁾、一方、当該本が主訓とする「チタヒ」は広瀬本、紀州本に見られる、非仙覚本系片仮名訓本に由来する訓である。(例六)における紫訓「チタヒ」は、それだけを見れば独自訓のようではあるが、同巻中で同じ漢字本文を持つ(参考例三)を見れば、非仙覚本系片仮名訓本由来の寛元本の訓として蓋然性があるというわけである。紫訓にはそのような例がまま見られる。

(例七) 卷四・五一五・第五句「哭耳之曾泣」
(ナキノミシソナク)

・ナキノミシソナク……元、古今和歌六帖

・ネヲノミソナク……金、陽古(左紫)

・ナキノミソナク……類、紀、広、細(二)、陽古(右紫)

・ナキノミシソナク……古(シを消す)

・ネノミシソナク……宮、西(ネノミ元青)、陽(ネノミシ青)、温、

矢(ネノミシ青)、近(ネノミシ青)、京(ネ

ノミシ青)、陽古(ネノミシ緑)

・ナキノミシソナク……陽古(左の左紫)

この例の右にある紫訓「ナキノミソナク」は、紀州本、広瀬本等非

仙覚本系片仮名訓本の訓である。一方、左にある紫訓「ネヲノミソナク」は平仮名訓本である金沢本のみに残る訓である。さらに左の紫訓「ナキニソナク」は『校本万葉集』所収諸本のいずれにも見られない訓である。この訓「ナキニソナク」の独自性は、諸本が「耳」字をいずれも「ノミ」と訓んでいるのに対し、この訓のみ「ニ」と訓んでいる点にある。

『万葉集』中の〈ネナク〉系用言に付く「耳」字を「ニ」と訓むのは、卷二・二三〇歌・第二二句「泣^{ネノミ}耳^ミ師^シ所^ヲ 哭^{ナク}」¹⁴⁹に対する京大本代赭書入の「ナキニシソ」(左／右への移動記号あり)、当該紫訓の「ナキニ」(右)、紀州本、検天治本の「ナキニソナクト」、また卷四・六一四歌・第五句「哭^{ネノミ}耳^ミ四^シ泣^{ナク}裳^モ」に対する京大本代赭書入(左／入替記号あり)、当該紫訓(左)の「ナキニシ」、広瀬本の「或ナキニシナクモ」(右)などがある。また、卷四・六一九歌・第三八句「哭^{ネノミ}耳^ミ泣^{ナク}管^ツ」¹⁵⁰に対しては、京大本代赭書入(左／入替記号あり)、当該紫訓(左)の他、西本願寺本(左)、温故堂本(左)に「ナキニ」とあり、元暦校本(代赭)、紀州本主訓に「ナキニナキツ、」がある。

つまり、(例七)の左訓「ナキニシソナク」は、一首のみ見れば諸本に存在しない訓ということになるが、同巻中の類似表現から考えれば、京大本代赭書入と当該紫訓に共通の所謂禁裏御本訓として妥当性があり、それは非仙覚本由来のものであると言えるだろう。

当該紫訓は、現存諸本のいずれにも一致しない訓を有している。しかしそれらの多くは独自訓ではなく、集中の類似表現のある歌の訓から考えて、次点本、特に非仙覚本系片仮名訓本由来のものであると推定される例であった。このことは、文永本作成時に捨て去られてしまったために現存諸本には残らない、非仙覚本系片仮名本由来の寛元本の

訓を当該紫訓が残している可能性を示唆している。

本稿の目的は、当該紫訓が、禁裏御本および寛元本復元のために京大本代赭書入を補うものであることを証明することにあつた。そのため、本稿における調査は紀州本に仙覚訂正訓の書入のある巻一―四と、当該本の訓がすべて紫で書かれる巻十一の二丁分に限って行い、用例も当該紫訓が京大本代赭書入と相違するものを掲出した。今後、当該本二十巻すべてを調査し、京大本代赭書入との異同を精査することにより、当該本の系統的な位置づけや、寛元本本来の姿がいつそう明確になると考えられる。

「注」

- (1) 拙稿「陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」について―校合関係に関する調査を基に―」『萬葉』二〇八号(二〇一一年三月二〇日)、および拙稿「禁裏御本書入本の系統関係再考―近世初期の書写活動」『萬葉写本学入門―上代文学研究法セミナー』(笠間書院 二〇一六年)。
- (2) 『校本万葉集』首巻(岩波書店 一九三二年) 参照。
- (3) 京大本の調査に際しては、京都大学附属図書館ホームページ貴重資料画像 (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>) を利用した。

(4) なお、京大本には②の直前の行に代赭にて「此奥書ヨリ成俊記之至奥書無シ禁御本奥書奥有之」とあり、③の直後に代赭にて「応長元年―ヨリ至此奥書無 御本」とあって、②③が禁裏御本には存在しないことが明記されているが、「古活字本」にこのような注記はない。

- (5) 田中大士氏「万葉集京大本代赅書き入れの性格―仙覚寛元本の原形態―」『国語国文』第八十一巻第八号（二〇一二年八月）。本節で引用する田中氏論文は、すべてこれによる。
- (6) 『校本万葉集』首巻「万葉集諸本系統の研究」（岩波書店一九三一年）。
- (7) 万葉集叢書第八輯『仙覚全集』（臨川書店 一九七七年）の翻刻をもとに私に書き下し文に改めた。
- (8) (5)に同じ。本節で引用する田中氏論文は、特に指定しない限りこれによる。
- (9) 用例の掲出は京大本の訓に従って各句に区切って行っている。以下の用例数の掲出もすべて同様の方法によった。当該箇所との異同の確認は原則として『校本万葉集』により、神宮文庫本については『神宮文庫本万葉集』（勉誠社 一九七七年）を参照した。なお、一致率は、大きく問題とならない部分について、「ス」と「ヌ」、「チ」と「テ」などの誤写が考えられる場合や、紫書入のない部分（墨訓と同じであったために書き写さなかったと思われる部分）における軽微な異同を捨象して算出した。
- (10) ただし、田中氏の掲出方法とは若干の相違がある可能性がある。
- (11) 田中大士氏「万葉集片仮名訓本（非仙覚系）と仙覚校訂本」『上代文学』第一〇五号（二〇一〇年十一月）。
- (12) 本稿における調査はすべて『校本万葉集』により、ひらがな訓とカタカナ訓の区別はしない。また、本の名称は原則的に『校本万葉集』に従う。ただし、『校本万葉集』において神田本（神）と称される本は、現在の研究状況に照らし、紀州本（紀）と称する。当該本については陽古と記す。

- (13) 長歌訓ではあるが、同じような例として次のようなものもある。
- 卷三・四六六・第二二句 ナツケモシラス
「名付毛不知」
（ナツキ／巻）
- ・ ナツケモシラス……広、宮（朱）、細（一・朱）、細（二）、西、陽、温、矢、近、京、陽古
- ・ ナツキモシラス……紀、陽古（左紫／ナツキ）
- ・ ナツクモシラス……京（左赅／ナツク）
- 当該箇所は、非仙覚本系片仮名訓本である広瀬本、細井本（巻四への重複箇所）、寛元本系の神宮文庫本、細井本（巻三）、およびすべての文永本で「ナツケモシラス」と訓じられる。当該本の墨による主訓も同様である。京大本代赅書入の「ナツク」は『校本万葉集』所収諸本では他に見られない訓であるが、「ナツケ」からの誤写ではないかと疑われる。一方、当該本紫訓と同じ「ナツキ」の訓を持つのは、『校本万葉集』所収諸本のうち紀州本のみである。
- (14) (1)拙稿において、当該本は巻七錯簡本と禁裏御本との二本を校合本として成ったものと推定した。紫のみで書かれたこの二丁は、巻七錯簡本の影響を受けない、純粹なる禁裏御本の形を留めたものである可能性が高い。
- (15) この二丁分の短歌二十八首の紫訓のうち、京大本との異同のある箇所は十七箇所、うち仮名遣いの異同が九箇所、他本にない単独誤写と思われる異同が一箇所ある。
- (16) 他出文献の調査には『国歌大観』DVD-ROM版を用いた。
- (17) 引用は『契沖全集 第一巻』（岩波書店 一九七三年）によった。ただし、濁点は私に付した。
- (18) 当該紫訓には、平仮名訓本にのみ残る訓を受け継いでいる例がま

ま見られる。(参考例三)の他に、次のような例があげられる。

● 卷二・九三・第三句 「開而行者」
アケテ ユカハ
イナノ巻

・アケテイナハ……元、陽古(左紫ノイナ)

・アケテイカハ……金、類、古、広、宮、細、西、陽古(右紫ノイカ)

・アケテユカハ……元(右赭ユノ右朱カ)、紀、陽、温、矢、近、京、

陽古

・アケタラハ……古今和歌六帖(三〇六三、三一四八)

当該本の主訓である「ユカハ」は、紀州本等非仙覚本系片仮名訓本から文永十年本へと継承された訓である。一方、右にある紫訓「イカハ」は、金沢本、類聚古集等平仮名訓本から出て、古葉略類聚鈔、広瀬本等片仮名訓本、寛元本系の神宮文庫本、細井本、そして文永三年本まで継承された訓である。そして、左の紫訓「イナハ」は、平仮名訓本である元暦校本主訓にのみ存する訓である。当該紫訓は、右に寛元本にあったと見られる「イカハ」訓を書き、左には平仮名訓本のごく一部しか持たない「イナハ」の訓を書き入れている。紫訓の校合本は、どこかの段階で平仮名訓本との接触があった可能性がある。なお、当該例の主訓のように非仙覚本と文永十年本とが一致する例については、山崎健司氏(『仙覚本における「読み」の展開―文永三年本と文永十年本の異同をめぐって―』『萬葉』第百二十一号 二〇一六年三月)が配列の面から考察している。

(19) 歌句の掲出は当該「古活字本」によった。

